

## 江西省弋陽県の弋陽腔初探

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学経営学部人文科学研究室 公開日: 2012-09-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福満, 正博 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/13471">http://hdl.handle.net/10291/13471</a>

## 江西省弋陽県の弋陽腔初探

福 満 正 博

### 一、弋陽県の調査報告

二〇〇九年の一月に、福建省の建陽市と、江西省の弋陽県を調査した。弋陽県では、思った以上の成果を挙げることができた。それは、古い戯台の跡を実際に見ることができたからである。本稿では、まずそのことから報告したい。

江西省の東北の方向にある上饒市に、弋陽県は属する。東は浙江省に接し、南は福建省に接する、交通の要所でもある。しかし、宋代には池州等と共に、信州として江南東路に属していた。元代には福建も含めた江浙行省に、信州路として所属した。明代になってやっと広信府として江西に所属するようになった。したがって『漢語方言地図集』（曹志耘、二〇〇八）などを見ても、上饒市全体としてみれば、東隣の浙江省の方言、呉語と一致する傾向が強いようであ

る。私が現地で聞いた範囲でも、呉語に近い感じがした。『現代漢語方言概論』（侯精一、二〇〇二）によると、上饒市の東半分は呉語区とされ、弋陽県は西側の贛語の鷹弋片に所属するとされている。しかし実際には呉語も入り交わっているのであろう。更に調査の必要があるだろう。

この弋陽県はまた、中国の古代の戯曲である南曲の発祥の地の一つである。しかし、後で引用するが明末の湯顯祖に有名な文があり、それによれば明代の末には弋陽の調べは絶えたと記されていた（本稿では、それを否定することになる新資料、明末弋陽県で芸能が盛んに行なわれていたという宋懋澄の『九籟讀集』を、後に示した）。しかし、その後清代になっても、全国各地で弋陽腔の影響を受けた劇種が発展し、北京においても弋陽腔の後身という「京腔」が盛んであったとされる。したがって、外国にいる研究者としては、深く考えることもなく、弋陽以外の地では見ることができても、当地の

江西の弋陽で弋陽腔は消滅して見ることはできないと、なんとなく考えていた。

従来からも弋陽腔に関する記事は、弋陽県以外の地方志に見えることが指摘されていた。例えば、東側の玉山県志には、次のようにある。

紈袴子弟、操三絃琴、弄笙笛、以檀板羯鼓為之節。所尚必崑音也。謂之清客。或雜以銅絃濫矣。村落戲劇最喜西調。城市亦崑少弋多。自十月至十一月城隍廟絃管之声不絕昼夜。非承平日久民氣和樂、固未易得此。(清道光三年刻本、卷十一)

玉山県の村落では「西調(秦腔・椰子のこと)」が好まれ、城市部では、崑曲も好まれたが、弋陽腔の方が好まれたという記録である。

また、『鄱陽県志』の風俗の音楽の項にも、次のようにある。

東関外沿河一帶、多商賈集會公所。時喚崑弋兩部演劇祭神。元旦前後燈市簫鼓喧闐達旦。端午龍船競渡鼓聲鑿鑿。然而一二閑散之流或吹笙或撫琴或彈琵琶或弄箏篋、各隨所好以為樂。(清道光四年刊本)

東側の鄱陽県では、商人の会館で、崑曲と並んで弋陽腔を上演し

て祭祀を行っていたという記録がある。これらは全て弋陽県以外のものであった。しかも、幾つかある現存する『弋陽県志』のどの刊本にも、残念ながら弋陽腔に関する記録は見えなかった。

したがって江西の弋陽に行こうと思った最初の目的は、福建の建陽との地理関係を実感したいということであった。弋陽についていたら町を散策して、なにか遺構でも見つかれば、もうけものぐらいいにか思っていないかった。ところが、当地の文化局と連絡を取って準備をしているうちに、途中から弋陽県には相当数の戯台の遺跡が残っていることが分かった。現地に到着した後も、弋陽県の文化局長の黄英龍氏や副局長の呉波氏に親切にいただき、古い戯台に案内してもらい幾つか見ることができた。これは、外国人が一人では決して見ることができないものであった。配慮を頂いた弋陽県の文化局に深く感謝するとともに、幾つかの資料を使って、弋陽腔に関する知見を残しておきたい。



図1

まず、図1は同治十(一八七二)年刊の『弋陽県史』の図である。県城の前(南側)を流れる川が、「信河」と記してある。これは、現在信江といわれている川である。昔の県城は河の北側に城壁に囲まれてあったということが分かる。県城の北側にも河が流れている。中に「江村義渡」「後港義渡」などの字が見える。現在の地図で「葛溪」と呼ばれている河のことであろう。

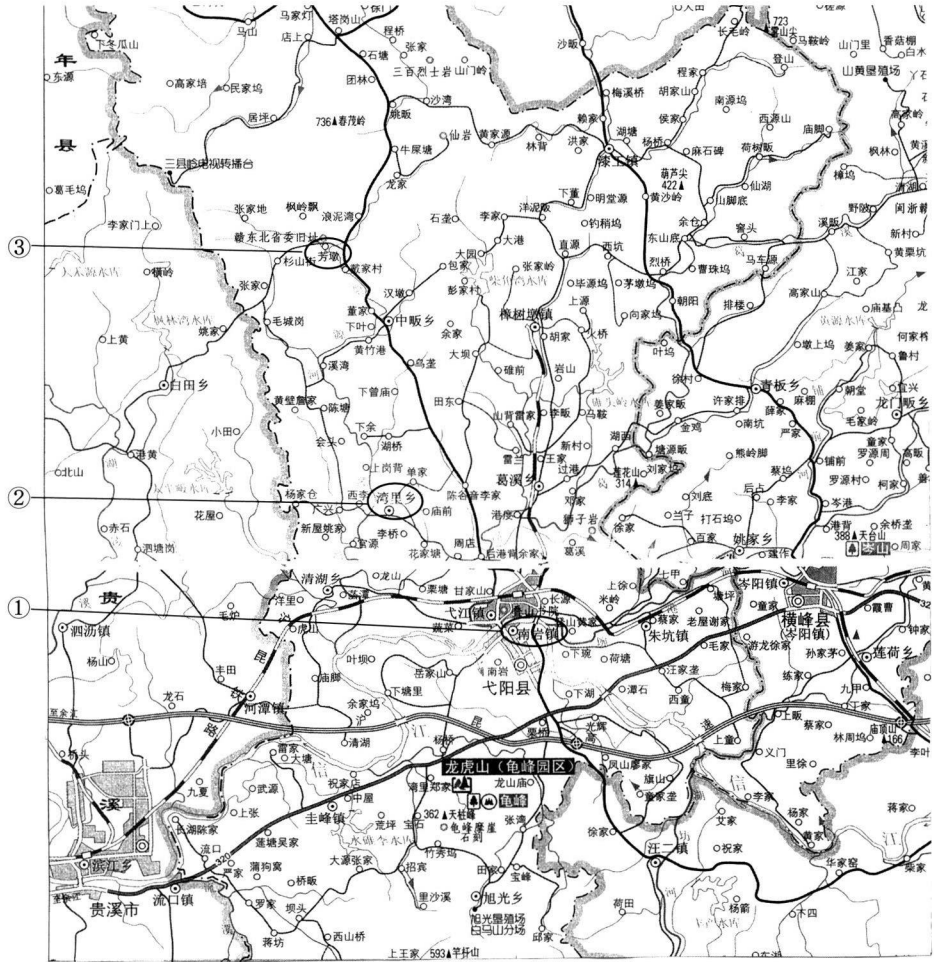


図 2

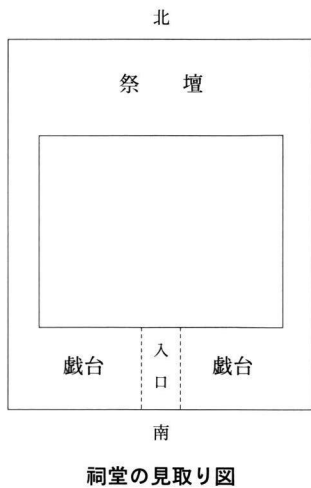


図 2 は、現在の弋陽県の地図である『江西省地図冊』（中国地図出版社）から引用したものである。私が見た古戲台は三か所で、地図に①②③の印を記してある。

最初に見たものは清朝の同光（一八二一〜一八五一）年間のものとされる「董家台」①である。弋陽県の中心から信河を隔てた南側、「南岩鎮齊僚坂」という地名であった。戲台は、姓が董という一族の宗廟・祠堂の中にあつた。祠堂の見取り図は、次のようである。



写真1 祠堂の西側側面



写真2 北側の祭壇跡



写真3 南側戲台



写真4 舞台の下が入り口

北側に、先祖をまつた祭壇があったが、現在は何も残っていない。それを望む南側に祠堂の入口があり、その上に戲台がある。これらを写したのが、写真1〜4である。

入口の上に、戲台があるのは興味深い。というのは私が山西省の関帝廟で見た戲台が、ほとんど入口に設置されていたからである。



写真6 入口の上に舞台がある



写真5 入口付近



写真8 舞台の左側



写真7 舞台の右側

次に見たのは、湾里郷②の西李村にあった李氏宗廟の戲台である。説明によれば、この地の李氏は四つに分かれ、西側に住む李氏が、西李氏である。始祖が李奎という人物で、字が文耀、号が九川であった。永樂十年の進士で、『九川李氏宗譜』が残っているらしい。そこに宣徳二年に祠堂と戲台を建てた記録があるそうである。宣徳年間といえ、五百年以上の話になる。最初に見た童家の戲台よりも数百年古いことになる。弋陽県で現存する戲台としては、最も古いものだそうである（龔国光「江西弋陽腔探源」、『弋陽腔新探』二〇〇六）。

李氏の戲台は、弋陽県で現存する最古の戲台ということもあるのか、大きくはなかった。戲台の反対側にも空間があったので、あちらが宗廟の祭壇跡かと質問したら、違うとのことであった。後で専門家の江西省芸術研究所の萬葉先生に話を伺ったところ、戲台は三層構造で、戲台の上に祭壇があったとのことである。舞台も他の地域と異なり、舞台への出入口が八つあったという。確かに写真で見ても、左右だけでなくあちこちに口があることが分かる。これは、演目に神仙劇が多く、様々な役が多数出入りしたからだという。北京の故宮に有名な三層戲台があるが、その原型とも言えそうだ。これらを写したのが写真5〜8である。

つぎは、もっと北の郊外の中畝郷の芳墩の露台③である。清朝の康熙年間に築造された戯台ということであった。残念なことに、もう崩壊寸前であった。ただ、話では露台ということであったが、舞台の向かいには何がありましたかという私の質問に、昔は道観（道教のお寺）でしたという答えであったから、宗教的な関係が深かったのだと思われる。

見学が終わって、現地の文化局の方に、すぐ近くの劇場に連れて行ってもらった。驚いたことに、そこは現在でも盛んに行われていた劇場で（「芳墩劇場」、演員がちょうど練習をしていた。村に劇場があるというのも、日本では考えられない驚きである。舞台の反対側に神像が安置してあった。舞台と神像が向かい合う構造は、基本的に宗廟の舞台と同じである。何の神像なのかということも、聞かなかった。もし演劇の戯神であれば、この弋陽県の弋陽腔の祖師とされる「爺老郎先師」という劇神だと思われる。これは、伝説では杭州から伝わったとされる演劇の芸人の神様である。これらを写したのが写真9〜13である。



写真9 芳墩の古戯台

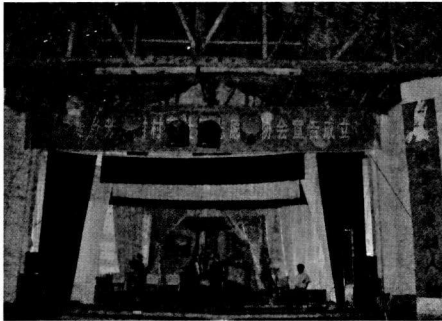


写真11 劇場の舞台



写真10 現在の芳墩劇場



写真13 戯神



写真12 戯神





写真15 舞台



写真14 弋陽県の劇場



写真17 楽団の練習風景



写真16 演員の練習風景

ところをもっと驚いたのは、現在でも弋陽県に弋陽腔の劇団があって上演活動を続けているということであった。まさに生きていた弋陽腔である。県の劇場に案内され練習風景まで見せてもらった。それが次の写真14～17である。

従来の研究では弋陽腔は、昆曲と対比されることが多かった。都会的な江南の昆曲と比較して地方的なイメージで語られることが多かった。実際に弋陽県の戯台を見て、意外に弋陽腔は、宗廟や道観などの宗教性とも深く結びついているという印象を新たにもった。

## 二、弋陽腔の歴史

次に弋陽腔の歴史に関する文献的な記述を、ここで簡単に振り返って、演劇史上における弋陽腔について、改めて考察しておきたい。弋陽腔の最初の記録は、祝允明（一四六一～一五二七）の『猥談』とされる。祝允明は、成化年間（一四六五～一四八七）、弘治年間（一四八八～一五〇五）、正徳年間（一五〇六～一五二一）を生き、嘉靖六年に死んだ人物である。『猥談』の書かれた年は、分かっていない。年齢から考えるに、弘治、正徳年間に書かれた可能性が高い。

今人間用薬苟簡錯乱。其初歌曲絲竹大率金元之旧。略存十七宮調、亦且不備。只十一調中填轉而已。雖曰不敢以望雅部。然俗部大槩較差雅部不啻數律。今俗部尤極高。而就其声察之、初無定一時高下隨工任意移易。蓋視金元製腔之時、又失之矣。自国初来、公私尚用優伶供事、数十年來、所謂南戲盛行、更為無端。於是声樂大乱。南戲出於宣和之後、南渡之際、謂之温州雜劇。予見旧牒、其時有趙閣夫榜禁、頗述名目。如趙真女・蔡二郎等亦不甚多。以後日增、今遍滿四方、轉轉改益、又不如旧、而歌唱愈繆、極厭觀聽、蓋已略無音律腔調。愚人蠢工、徇意更変、妄名余姚腔、海鹽腔、弋陽腔、崑山腔之類。變易喉舌、趁逐抑揚、杜撰百端、真胡說耳。若以被之管絃、必至失笑、而味士傾

喜之、互為自謾爾。（『說郛統』）

これによれば、明初十五世紀の終わり頃にはもう、余姚腔（浙江紹興府余姚）、海鹽腔（浙江嘉興府海鹽）、弋陽腔（広信府弋陽）、崑山腔（蘇州府崑山）などが、既に成立していたということである。興味深いのは、これらの地域が北宋では両浙路と江南東路に分かれるが、元代では江浙行省の浙東道という一つの区域に含まれることである。

その次は、魏良輔の『南詞引正』である。魏良輔は、沈寵綏の『度曲須知』に次のように述べられている。

嘉隆間有豫章魏良輔者、流寓畢東鹿城之間、生而審音、憤南曲之訛陋也、盡洗乖声、別開堂奥。

畢東や鹿城のあたりに住んでいたというのだから、崑山の付近に住んでいたということであろう。嘉靖（一五二二～一五六六）・隆慶（一五六七～一五七二）の頃の人であった。魏良輔の『南詞引正』は、通常『曲律』の名前で、『吳歎萃雅』『詞林逸響』『吳騷合編』などの散齣集の巻首に附刻されているものが知られていた。ところが新しく文徵明の手写をもとにした抄本が発見された。「姜江尚泉魏良輔『南詞引正』」となっていて、内容もかなり異なっている。影印本が『真蹟日録』（北京図書館出版社、二〇〇二年）として出

版されている。一八条の短い文章からなる。その第五条に、次のようにある（貴重な資料なので、該当部分の影印を最後の写真18に付した）。

一、腔有数様、紛紜不類。各方風氣所限、有昆山、海鹽、余姚、

杭州、弋陽。自徽州、江西福建俱作弋陽腔。永樂年間、雲貴二省皆作之、会唱者頗入耳。惟崑山為正声、乃唐玄宗時、黃幡綽所傳。元朝有顧堅者。雖離崑山三十里、居千墩、精于南辭、善作古賦。扈廓帖木兒聞其善歌、屢招不屈。与楊鉄笛、顧阿瑛、倪元鎮為友、自号風月散人。其著有『陶真野集』十卷、

『風月散人樂府』八卷行于世。善發南曲之奧、故国初有崑山腔之稱。

この記述によれば、安徽、江西、福建の三つの地域にわたって弋陽腔が流行した。永樂年間（一四〇三～一四二四）には、既に雲南・貴州省まで広がっていたというのである。つまり弋陽腔は、一五世紀の初めには西南地域に到るまでの広域に弋陽腔が伝播して、あちこちで歌声が聞かれたというのである。

次は徐文長（一五二一～一五九三）の『南詞叙録』の記述である。

今唱家稱弋陽腔、則出於江西、兩京、湖南、閩、廣用之。稱餘姚者、出於会稽、常、潤、池、太、揚、除用之。稱海鹽腔者、

嘉、湖、温、台用之。惟崑山腔止行於吳中、流麗悠遠、出三腔之上、聽之最足蕩人。妓女尤妙此、如宋之嘌唱、即旧声而加以泛艶者也。隋唐正雅樂、詔取吳人充弟子習之、則知吳之善謳、其来久矣。

ここでは、弋陽腔の広がりとして、北京・南京の「二京」と、湖南・広東「廣」とが挙げられている。

ところが、逆の記録もある。其れは戯曲家としても有名な湯顯祖の（一五五〇～一六一七）の「宜黄県戯神清源師廟記」である。

人生而有情。思歡怒愁、感於幽微、流乎嘯歌、形諸動搖。或一往而尽、或積日而不能自休。蓋自鳳凰鳥獸以至巴渝夷鬼、無不能舞能歌、以靈機自相転活、而況吾人。奇哉清源師、演古先神聖八能千唱之節、而為此道。初止鑿弄參鷗、後稍為末泥三姑且等雜劇傳奇。長者折至半百、短者折才四耳。生天生地生鬼生神、極人物之萬途、攢古今之千變。一勾欄之上、幾色目之中、無不紆徐煥眩、頓挫徘徊。恍然如見千秋之人、発夢中之事。使天下之人無故而喜、無故而悲。或語或嘿、或鼓或疲、或端冕而聽、或側弁而哈、或闔觀而笑、或市湧而排。乃至貴倨弛傲、貧齋爭施、瞽者欲玩、聾者欲聽、啞者欲嘆、跛者欲起。無情者可使有情、無声者可使有声。寂可使喧、喧可使寂、飢可使飽、醉可使醒、行可以留、臥可以興。鄙者欲艶、頑者欲靈。可以合君臣之

節、可以浹父子之恩、可以增長幼之睦、可以動夫婦之歡、可以發賓友之儀、可以釈怨毒之結、可以已愁憤之疾、可以渾庸鄙之好。然則斯道也、孝子以事其親、敬長而娛死。仁人以此奉其尊、享帝而事鬼、老者以此終、少者以此長。外戸可以不閉、嗜欲可以少營。人有此声、家有此声、家有此道、疫癘不作、天下和平。豈非以人情之大寶、為名教之至樂也哉。

予聞清源、西川灌口神也。為人美好、以遊戲而得道、流此教於人間、訖無祠者。子弟開呵時一醪之、唱囉哩哩而已。予每為恨。諸生誦法孔子、所在有祠、仏老氏弟子各有其祠。清源師号為得道、弟子盈天下、不滅二氏、而無祠者、豈非非樂之徒、以其道為戲相詬病耶。

此道有南北。南則崑山之次為海鹽、吳浙音也。其体局靜好、以拍為之節。江以西弋陽、其節以鼓、其調誼。至嘉靖而弋陽之調絶、變為案平、為徽青陽。我宜黃譚大司馬綸聞而惡之。自喜得治兵於浙、以浙人婦教其鄉子弟、能為海鹽声。大司馬死二十余年矣、食其技者殆千余人。聚而諗於予曰、吾属以此養老長幼世、而清源祖師無祠、不可。予問倘以大司馬從祀乎。曰不敢。止以田寶二將軍配食也。予額之。…(『湯頭祖詩文集』卷三十四)

この話で、湯頭祖は劇作家らしく、始めに演劇の効能、演劇論を述べる。そのあと、江西の臨川の南に位置する宜黄県に、演劇が盛んになった由来を述べる。最後に当地の芸人たちが劇神を祀る廟を

創る話に協力するというものである。この中で、湯頭祖は弋陽腔の消息にふれ、「調絶」したと述べている。そして案平腔や、安徽の青陽腔が代って起こったことを述べている。しかし弋陽腔は、今回の調査で見たように、当地弋陽でも絶えていなかった。ここではとりあえず、明末に案平腔や青陽腔が新しく勃興してきたことは、確認できる。

弋陽腔が、江西の弋陽県以外の地でも絶えていなかったことは、当時の記録からも確認できる。明末の人馮夢禎(一五四六〜一六〇五)に『快雪堂日記』というのが残っている。この中に三か所(萬曆一八・二七・三三年)「弋陽腔」に関する記事が見える。今、その一つを引用して見る。

庚寅(萬曆一八、一五九〇年)、  
九月二八。晴。

湖上訪雪浪法師。晤明宗、宗檢藏於靈芝寺。過中於掃元山主所。晤蓮池老人於上方。会介山講師來。同歩至巷口而別。唐季泉等宴寿岳翁。扳余作陪、搬弋陽戲。夜半而散。疲苦之極。因思長卿、乃好此声。嗜痴之癖、殆不可解。(『快雪堂日記』卷五十一)

杭州に住んでいた馮夢禎が、友人の宴会の席で弋陽腔を見たという記録である。友人の屠隆(字は長卿、一五四二〜一六〇五)は、弋陽腔が好みであったとする。

また戯曲の理論家王驥徳の『曲律』（天啓五、一六二四年）には、次のように述べられている。

#### 論腔調第十

夫南曲之始、不知作何腔調。沿至於今、可三百年。世之腔調、每三十年一變、由元迄今、不知幾幾變更矣。大都創始之音、初變腔調、定自渾樸、漸變而之婉媚、而今之婉媚極矣。旧凡唱南調者、皆曰海鹽、今海鹽不振、而曰崑山。崑山之派、以太倉魏良輔為祖、今自蘇州而太倉松江、以及浙之杭・嘉・湖、声各少變、腔調略同、惟字泥土音、開閉不辨、反譏越人呼字明確者為浙氣、大為詞隱先生所疵、詳見其著正吳編中。甚如唱火作呵上声、唱過為箇、尤為可笑。過之不得為箇、已載編中、而火之不可為呵上声、詞隱先生猶未之及也。然其腔調、故是南曲正声。数十年来、又有弋陽、義烏、青陽、徽州、樂平諸腔之出。今則石臺、太平梨園、幾遍天下、蘇州不能与角什之二三。其声淫哇妖靡、不分調名、亦無板眼、又有錯出其間、流而為兩頭蠻者、皆鄭声之最、而世爭趨趨痴、靡然和之、甘為大雅罪人、世道江河、不知變之所極矣。

#### 論板眼第十一

今至弋陽、太平之「衰唱」、而謂之「流水板」、此又拍板之一大厄也。

「論腔調」によれば、海鹽腔・崑山腔に代わって、弋陽腔・義烏腔・青陽腔・徽州腔・樂平腔が出てきて、その上に最近はまた新しく石臺腔、太平腔が出現してきていと述べている。魏良輔の『南詞引正』では、崑山腔、海鹽腔、弋陽腔の間に序列は無かった。しかし王驥徳は、海鹽腔に始まり崑山腔と続くとする歴史的な序列を示し、且つこの二つが「南曲之正声」だという価値的な位置付けもするのである。そして弋陽腔は新しく「大雅之罪人」というのだから結局は「変雅」という低い価値判断もするのである。しかし、歴史的な順番は、湯頭祖の崑山腔に始まり、海鹽腔がそれに次ぐという認識と、反対の認識となっている。

また、弋陽腔と太平腔には、「衰唱」が有り、「流水板」とも呼ばれていたという、貴重な証言を残している。この「衰唱」が、「衰調」として明末に出版される徽調の散齣集などに、多く録されている。

明代には、宮廷で弋陽腔が採用されていたという記録もある。沈徳符の『萬曆野獲編』には、次のようにある。

#### 禁中演劇

内廷諸戲劇俱隸鐘鼓司。皆習相伝院本。沿金元之旧。以故其事多與教坊相通。至今上始設諸劇於玉熙宮、以習外戲。如弋陽、海鹽、崑山諸家俱有之。其人員以三百為率、不復属鐘鼓司。頗采聽外間風聞、以供科譚。如成化間阿丑之属（『四友齋叢説』

卷十に詳しく述べられている（筆者注）、以故侍上寵頗千外事。近日聖意頗覺之、進膳設劇、頓減於旧、此輩亦少戢矣。（『萬曆野獲編補遺』卷一）

従来明の宮廷では、金元以来の北曲を上演してきた。萬曆帝の頃から、南曲の弋陽腔、海鹽腔、崑山腔を採用するようになったというのである。人員は三百人ほどであったとあるが、それは一つ一つの腔調が三百人ずつの劇団員を有していたのか、演劇関係者が全部で三百人だったかは、分からない。ともかく弋陽腔は、宮廷でも採用されるようになっていたのである。

このようなことは、宮廷だけでなく富裕な家庭でも行われていたようである。顧起元（一五六五〜一六二八）は、萬曆二六年の殿試一甲の人物である。顧起元は次のように述べている。

南都萬曆以前、公侯与縉紳及富家、凡有讌会、小集多用散樂、或三四人、或多人、唱大套北曲、樂器用箏、箏、琵琶、三絃子、拍板。若大席、則用教坊打院本、乃北曲大四套者、中間錯以撮墊圈、舞觀音、或百丈旗、或跳隊子。後乃變而尽用南唱、歌者祇用一小拍板、或以扇子代之、間有用鼓板者。今則吳人益以洞簫及月琴、声調屢變、益為悽惋、聽者殆欲墮淚矣。大会則用南戲。其始止三腔、一為弋陽、一為海鹽。弋陽則錯用鄉語、四方土客喜聞之、海鹽多官語、兩京人用之。後則又有四平、乃稍變

弋陽而令人可通者。今又有崑山、校海鹽又為清柔而婉折、一字之長、延至數息、士大夫稟心房之精、靡然從好、見海鹽等腔已白日欲睡。至院本北曲、不啻吹篴擊缶、甚且厭而唾之矣。（『客座贅語』卷九）

元々富豪の家では、宴会のときなどに北曲の上演や小規模な芸能が催されていた。その後、弋陽腔や海鹽腔などの南曲が人気を博するようになったというのである。弋陽腔は方言が多く、海鹽腔は「官語」を使用していたという。しかし海鹽腔は、後に同じ呉地方の崑山腔に取って代わられたという。作者の顧起元は、南京の出身なので、海鹽腔のような嘉興府の言葉、現在でいえば呉語太湖片の言葉が近いものに感じたのか、或いは海鹽腔は本当に官語を使っていたのか分からない。いずれにせよ、「官語」というのは南京官話のことであつたろうと思われる。最後には、富豪の家で行われる演劇は、南曲と北曲が交代し、北曲は顧みられなくなったのである。

以上は、弋陽県以外の場所における弋陽腔の記録である。これに對して、明代の江西の弋陽県について、直接見聞した新しい資料がある。それが、明末の萬曆年間の人である宋懋澄の文集の中にある。次に引用して見る。

弋陽 二

弋陽城下泊舟不可唱。唱則吳中群起迭歌、慙動索和客歌唱。若窮則岸上爭以瓦礫相擲幾亡。其生客能和、至四更則主人亦漸引去。蓋天下優人十九出弋陽。故主人好勝一至于此。吳人云江陰莫動手、無錫莫動口。豈特弋陽哉。然吳歌楚調不相入如薰蕕。彼其相和如東西、司長俱有競心、都無擁和之雅。又腔曰樂平、地屬饒州。豈鳳游（樂平県の山名・筆者注）鶴阜（呉県の山名・筆者注）獨協八音。以予聽之、然歎否也。又其次曰青陽、乃南國矣。〔九籥統集〕卷十雜著、明萬曆刻本）

著者の宋懋澄は、後の呉偉業の「宋幼清墓誌銘」（『梅村家藏藁』卷四七）によれば、天啓一（一六二二）年に五一歳でなくなった、主に明末の萬曆年間をきたた人である。長く北京と蘇州に住んでいたが、「如齊、如秦、如汴、如豫章、如楚、越、皆居焉」と述べられるように、全国各地を流寓した経験もあるらしい。豫章（江西省南昌）にも住んだことがあるということなので、弋陽県に関する記述は、相当程度信用できるだろう。それによれば、弋陽県は芸能の盛んな地域であったことを確かめることができる。また全国の役者の十人に九人は弋陽出身であったというのは、大袈裟な表現だとしても、当時はまだ弋陽県は芸人を輩出していたということである。湯顯祖の言うように、「至嘉靖而弋陽之調絶」というのは、正確ではなかったということが分かる。

清代になると、弋陽腔は、「高腔」とか「京腔」と呼ばれることもあったらしい。李調元（乾隆二八年の進士）の『劇話』に次のように述べられている。

「弋陽（腔）」始弋陽、即今「高腔」、所唱皆南曲。又謂「秧腔」、「秧」即「弋」之転声。京謂「京腔」、粵俗謂之「高腔」、楚・蜀之間謂之「清戲」。向無曲譜、祇沿土俗、以一人唱而衆和之、亦有緊板、慢板。

弋陽腔が、北京では「京腔」他の地域では「高腔」「清戲」などと呼ばれていたことが分かる。また特徴として一人が歌い衆人が和する「幫腔」が行われていたことを記録している。

この弋陽腔の特徴は、著名な戲曲理論家の李漁の『閒情偶寄』（音律第三）にも、述べられている。

詞曲中音律之壞、壞於南西廂。凡有作者、當以之為戒、不當取之為法。非止音律、文芸亦然。請詳言之。填詞除雜劇不論、止論全本、其文字之佳、音律之妙、未有過於北西廂者。自南本一出、遂變極佳者為極不佳、極妙者為極不妙。推其初意、亦有可原、不過因北本為詞曲之豪、人人贊羨、但可被之管弦、不便奏諸場上、但宜於弋陽、四平等俗優、不便強施於崑調、以係北曲而非南曲也。茲請先言其故。北曲一折、止隸一人。雖有數人在

場、其曲止出一口、從無互歌、迭詠之事。弋陽・四平等腔、字多音少、一洩而尽。又有一人啓口、數人接腔者、名爲一人、實出衆口。故演北西廂甚易。崑調悠長、一字可抵數字、每唱一曲、又必一人始之、一人終之、無可助一臂者。以長江・大河之全曲、而專責一人、即有銅喉鉄齒、其能勝此重任乎。此北本雖佳、吳音不能奏也。

李漁は、北曲が四折を一人で歌うので、非常に難しいことを訴えている。しかし、弋陽腔のような場合は、実際には一人の歌に合わせるべく多くの人が合唱するので、実際の上演が比較的容易になることを指摘している。ここでも、一人が歌い衆人が和する、弋陽腔の特徴である「幫腔」が取り上げられている。

また、康熙年間の人である劉廷璣の『在園雜志』（康熙五四、一七一五年）には、次のように書かれている。

旧弋陽腔乃一人自行歌唱、原不用衆人幫合。但較之崑腔則多帶白作、曲以口滾唱爲佳、而每段尾聲、仍自收結。不似今之後台衆和、作啾啾囉囉之聲也。西江弋陽腔、海鹽浙腔、猶存古風、他處絕無矣。近今且弋陽腔爲四平腔・京腔・衛腔。甚且等而下之、爲梆子腔・乱彈腔・巫娘腔・瑣哪腔・囉囉腔矣。愈趨愈卑、新奇疊出、終以崑腔爲正音。（卷三）

劉廷璣も、衆人が舞台の後ろ（「後台」）から一人の歌に合わせることを指摘している。しかし、衆人で歌うので、「啾啾囉囉之聲」といって、喧しいことを指摘している。

興味深いのは、冒襄（一六一一～一六九三）の文言小説『影梅菴憶語』でも、女性との出会いの場面が、次のように描かれている。

是日演弋陽腔「紅梅」。以燕俗之劇、啞呀啞晰之調、乃出之陳姫身口、如雲出岫、如珠在盤、令人欲仙欲死。

冒襄が弋陽腔のことをここで「燕俗之劇」というのは、弋陽腔が北京に進出して「京腔」として、定着していたことを示しているだろう。ともあれここでも、弋陽腔のことを、「啞呀啞晰之調」と表現している。やはり本来喧しいというイメージの劇種であったというところであろう。李漁も、別の場所で、弋陽腔のことを、

予生平最惡弋陽腔・四平等劇、見則趨而避之。但聞其搬演西廂、則索觀恐後。（『閒情偶寄』音律第三）

とも述べている。弋陽腔の喧しさを嫌っているが、その存在の未来に期待をかけているようである。

清朝は、少数民族による支配であったため、しばしば文字の獄が起きた。書いた文字や文章の内容が原因で弾圧される事件である。



この事件の調査報告書の中に、弋陽腔に関する興味深い記述がある。以下は、江西巡撫郝碩の上奏文である。

#### 郝碩摺

江西巡撫臣郝碩謹奏、為遵旨覆奏事。竊臣於乾隆四十五年十二月二十五日、承准大学士公阿桂等字寄、乾隆四十五年十一月二十八日奉上諭。前因外間流傳劇本、如明季国初之事、有関涉本朝字句、亦未必無違礙之處、傳諭伊齡阿全德、留心查察斟酌妥辦。

茲據伊齡阿覆奏、派員偵密搜訪查明、應刪改者刪改、應抽掣者抽掣、陸續粘籤呈覽。再查崑腔之外、有石碑腔・秦腔・弋陽腔・楚腔等項、江・廣・閩・浙・四川・雲・貴等省、皆所盛行。請勅各督撫查辦等語、自應如此辦理。

著將伊齡阿原摺抄、寄各督撫閱看、一體留心查察。但須不動生色、不可稍涉張皇。將此遇各督撫奏事之便、傳諭知之。欽此欽遵、寄信到臣。

臣查江西崑腔甚少。民間演唱有高腔・梆子腔・亂彈等項名目。其高腔又名弋陽腔。臣檢査弋陽縣旧志有弋陽腔之名。恐該地或有流傳劇本、飭令該縣留心查察。

隨據稟稱。弋陽之名、不知始於何時、無憑稽考。現今所唱即係高腔、並無別有弋陽詞曲。

並據附省之南昌府稟稱。遵經傳諭、各戲班、將戲本內事涉明季、

及関係南宋金朝故事、扮演失当者、嚴行禁除外、所有繳到各戲本、派員查核。內有「全家福」「乾坤鞘」二種、語有違礙。又「紅門寺」一種、扮演本朝服色。應呈、請查辦等情。

臣与藩臬兩司覆核無異。查江右所有高腔等班、其詞曲悉皆方言俗語、俚鄙無文、大半鄉愚随口演唱、任意更改。非比崑腔傳奇、出文人之手、割闕成本、遐邇流傳。是以曲本無幾。其繳到者亦係破爛不全抄本。現在檢出之三種內、「紅門寺」係用本朝服色。「乾坤鞘」係宋金故事、應行禁止。「全家福」所稱封号語涉荒誕。且核其詞曲、不值刪改、俱應竟行銷燬。臣謹將原本粘籤、恭呈御覽。

至如瑞州・臨江・南康等府、山隅僻壤、本地既無優伶、外間戲班亦所罕至。惟九江・広信・饒州・贛州・南安等府、界連江・廣・閩・浙、如前項石碑腔・秦腔・楚腔時來時去。

臣飭令各該府、時刻留心、遇有到境戲班、傳集開諭、務使一體遵禁改正。昭我皇上端本維風之至治、仍不許稍有張皇、及苟且從事。致干嚴行參究所有。

現在遵旨查辦緣由、理合恭摺覆奏。伏祈皇上睿鑒謹奏。  
乾隆四十六年四月初六日。硃批知道了。(『史料旬刊』二十二期、商務印書館)

長い報告書であるが、江西巡撫の上奏文であるから、江西に関する多くの情報を読み取ることができる。当然のことであるが、民間

で崑曲を演ずることは少なかったようである。弋陽腔の別名を高腔ということ。流行していたのは、弋陽腔以外にも、石碑腔・秦腔・梆子腔・乱弾などがあり、既に民間では、梆子系の演劇が席卷しつつあったことが分かる。弋陽腔系の劇団では、完全な劇本がなく、「破爛不全抄本」というのであるから、ボロボロの部分的な台本しかなかったようである。又、江西の北側長江に接する九江府や、北東側の安徽に接する饒州府や、東側の福建・浙江に接する広信府（弋陽県を含む）や、南側の広東に接する贛州府・南安府などでは、外部から石碑腔・秦腔・楚腔などの劇団が往来していた。このようなことが、江西巡撫之、乾隆帝に対する奏上文から見取れる。以上が、江西省弋陽県での現地調査と、弋陽腔に関する清初までの歴史的文献を集めたものである。

最後に、今回の調査でお世話になった、中央戯曲研究院の劉禎院長、江西省社会科学学院の萬葉先生、林宇研究員、弋陽県の文化局の黄英龍局長、呉波副局长などの皆さんに、感謝の意を表します。

枝香如混唱別調則亂規格久：成熟後宮換呂自然貫串  
 一拍乃曲之餘最要得中如迎頭板隨字而下轍板隨腔  
 而下旬下板即絕板腔盡而下有迎頭板慣打轍板乃不識  
 字戲子不能調平仄之故 一清唱謂之冷唱不比戲曲：  
 藉鑼鼓之勢有躲閃省力知者辨之 一生詞要細玩虛心  
 味之未到處再精思不可自做主張終為後累 一腔有數  
 樣紛紜不類各方風氣所限有崑山海鹽餘姚杭州弋陽自  
 徽州江西福建俱作弋陽腔永樂間雲貴二省皆作之會唱  
 者頗入耳惟崑山為正聲乃唐玄宗時黃旛綽所傳元朝有  
 顧堅者雖離崑山三十里居于南辭善作古賦擴廓

帖木兒聞其善歌屢招不屈與楊鈇笛顧阿瑛倪元鎮為友  
 自號風月散人其著有陶真野集十卷風月散人樂府八卷  
 行于世善發南曲之奧故國初有崑山腔之稱 一雙疊字  
 上兩字接上腔下兩字稍襍下腔如字：錦中思：想：心  
 心念：又如素帶見中它生得齊：整：裊：停：類餘仿  
 此 一單疊字又不比雙疊字如冷清：等要抑揚 一北  
 曲與南曲大相懸絕無南腔南字者往要頓挫有數等五方  
 言語不一有中州調冀州調古黃州調有磨調絃索調乃東  
 坡所傳偏于楚腔唱北曲宗中州調者佳伎人將南曲配絃  
 索真為方底圓蓋也閩漢卿云以小冀州調按拍傳絃最妙

写真 18 「南詞引正」、(『真蹟日錄』)